

デューイにおける「探究の態度」に関する一考察

飯塚 順子

はじめに

デューイ (John Dewey, 1859-1952) における「探究の理論」は、デューイ教育理論の根幹に関わるものと同時に、デューイ思想がよって立つプラグマティズムの基本概念とみなされている。それゆえ、「探究の理論」については、さまざまな研究が行われてきた。

日本におけるデューイ「探究の理論」研究は、おおよそ次の3つの方向から行われてきた。まず、デューイ「探究の理論」を現在の日本の授業へ利用しようとしたものである。その代表的なものとしては、「探究」の構造をその質的思考論から詳細に考察し、そこにおける「探究」のモデルを実際の授業へと発展させようとした佐々木のものがある¹。佐々木による「探究の理論」の実践への援用の試みは、その後、美術教育の岡崎等にも着眼引用された点である²。

次に、「探究」の構造そのものの究明に焦点が当てられたものである。その代表的なものとしては、牧野や杉浦の研究がある。牧野による研究は、「探究」の論理的構造の分析に焦点があてられたものであり³、杉浦による研究は、「探究」の構造を分析することを通して、「探究」の本質を究明しようとしたものである⁴。

最後に、デューイの「探究の理論」の現代的意義を考察したものである。その代表的なものとしては、早川の研究がある⁵。早川による研究は、現代の哲学者や教育学者による「探究の理論」に関する評価を分析したものである。

このような、佐々木、杉浦、牧野、早川等による「探究の理論」に関する研究は、いずれも「探究」の構造に焦点があてられた、論理的操作の発展的パターンに関する研究であったと見ることができる。

一方、「探究の理論」研究が、論理的側面からの考察のみであったという問題に関して、近来、「探究の理論」を心理的側面から考察しようとするものがあらわれている。服部は、『いかに我々は思考するのか』を心理的側面から考察し、『いかに我々は思考するのか』を教育論として読む場合、「反省的思考」の5局面に代表されるような論理的側面のみに着目するのではなく、「反省

的思考」の心理的側面を視野にいれることによって、はじめてデューイの思考の訓練に関する理論が十分に理解可能となり、その理論を適切な形で実践へと移すことができる、と指摘している⁶。

このような服部による「探究の理論」に関する心理的側面からのアプローチは、これまで論理的分析が主とされてきた「探究の理論」に関する研究が、「探究」を推進する主体者の心理的側面、すなわち、「態度」や「傾向性」へと着目されてきたあらわれであるといえる。「探究」を推進する主体者の「態度」や「傾向性」に関して、服部によりその研究の可能性が指摘されたわけであるが、服部の考察には、「探究」の心理的側面を生じさせるものが何であるかということについては言及されていない。この言及がなされない場合、「探究」の心理的側面からの論理的分析のみならず、「探究」の構造分析がその本質的解釈を欠いたものになると筆者は考える。筆者は基本的に、デューイにおける「探究」が信念に基づく「態度」に支えられたものであると考える。

そこで、本稿では、「探究」における信念の問題を考察することを通して、「探究」における「態度」について検討する。本稿では、『論理学—探究の理論』(1938)と『いかに我々は思考するのか』(1910・1933)を主たる文献として用い、デューイによる信念と「態度」の関係を読み解いてみたい。

1. 「探究」における信念の問題⁷

「探究(inquiry)」とは、デューイによれば「反省的思考(reflective thinking)」ともいわれるものである。従って、「探究」も「反省的思考」も同じものを意味する。しかし、デューイ自身、どちらを使用するかには、ある一定のきまりがあるようである。『論理学—探究の理論』においては、「探究」が、そして、平易な論理学の本と称される『いかに我々は思考するのか』においては、「反省的思考」が多く使われている。「探究」も「反省的思考」もロジックの世界のことではあるが、デューイによれば、「探究」の方が理想的な論理の世界

ということが出来る。なぜならば、デューイによれば、思考には良い思考、悪い思考があるが、「探究」には良い探究、悪い探究がないからである。

ところで、デューイによる「探究」とはどのようなことなのであろうか。デューイによる「探究」とは、「不確定な状況を、確定した状況に、すなわち、もとの状況の諸要素をひとつの統一された全体に変えてしまうほど、状況を構成している区別や関係が安定した状況に、統制され方向づけられた仕方と転換させることである」⁸と定義されるものである。簡潔に述べるならば、「探究」とは「不確定な状況」から「安定した状況」にすることである。

また、デューイは「探究」について次のようにもいう。「『探究』と疑問とは、ある程度まで同じ意味の言葉である。我々は疑問を持つとき『探究』する。すなわち、疑問に対する答えを求めるときに『探究』する」⁹。この叙述における「我々は疑問を持つ」の「疑問」は何に対して疑問を持つのだろうか。次のようなデューイの言明にその答えを見出すことができる。すなわち、デューイは、「『探究』は、人が真実であると信じてすでに抱いている何かやそれに対する疑問や不満に思っていることを証明することである」¹⁰と述べる。このようにデューイによる「探究」とは、「真実である」と信じていることに疑問をなげかけることから始まる。従って、「探究」のはじまりには、信念が大きくかかわっているといえる。

しかしながら、先述したように、従来の「探究の理論」研究では、信念の問題が看過されてきた。これまで看過されてきた「探究」のはじまりにある信念の問題を検討することにより、はじめて、「探究の理論」の本質をとらえることができる。なぜならば、デューイは、「探究」における信念と「態度」の問題を大人のことだけではなく、子どもにも信念や「態度」の問題があてはまるものであり、それは人間形成にとって重要な意味のあるものにとらえていたからである¹¹。

ところで、我々が日常生活において使用する信念という言葉は、「或る教理や思想などを、かたく信じて動かない心」¹²をあらわしており、どこか硬く信じて動かないというような強い意味があるように思われる。しかし、デューイによる信念 (belief) とは、日本語のあらゆる意味よりかなり軽い意味のようである。デューイは、「思考の三番目の意味は、實際上信念と同義語である」¹³と述べ、次のような例をあげている。「明日は曇りになりそうだと、私は思う」や「ユーゴスロヴァキアはハンガリーよりも大きいと、私は思う」は、「私

はそう信じてと同じである」¹⁴とデューイは述べる。

上記の例における「明日は曇りになりそうだと、私は思う」と「明日は曇りになりそうだと、私は信じて」が「同義」とはどのようなことなのであろうか。デューイの見解に従えば、我々は「實際上」、すなわち、日常生活においては厳密な区別をせず上記のような使い方をしているのである。従って、「明日は曇りになりそうだと、私は思う」と「明日は曇りになりそうだと、私は信じて」は、同じことを意味しているのである。

このような信念と同義の思考は、日々の生活の中で、頻繁に我々に起こるものであるが、デューイによれば、夢や白昼夢などの単に意識が流れていくだけの思考や見たり、聞いたり、味わったり、触ったりなどの直接経験をしていないものについて考える思考とは区別されるものである。デューイによれば、意識が流れていくだけの思考や直接経験をしていない思考は、あとになって役にたつようなこともなく、時間の浪費に終わる。このような思考は、デューイによれば、「感情的なかわりあい」は含むが、知的で実際的なかわりあいは含まない¹⁵ものであり、「精神に危険なもの」¹⁶となる。

一方、信念と同義語である思考、すなわち、「明日は曇りになりそうだと、私は思う」や「ユーゴスロヴァキアはハンガリーよりも大きいと、私は思う」は、発展の可能性の含まれた思考といえる。なぜならば、「信念は知的で実際的なかわりあいを含み、その結果として早晩、いかなる根拠に基づくものかを見極めるための我々の探究を求める」¹⁷からである。つまり、信念は、「知的で実際的なかわりあい」を含むと、根拠を調べるための「探究」へと進む。次に、「探究」へと進む信念について検討する。

2. 「探究」へと進む信念

既述したように、デューイによれば、信念は、「知的」で、「実際的なかわりあい」を含むと「探究」へと進む。ここにおける「知的」で、「実際的なかわりあい」とは、どのようなことなのであろうか。デューイは、次のような例をあげている。「人が空の雲を見て、鯨だとからくだとか考えることは一空想する (fancy) という意味において—そのような観念を持つ人がらくだに乗りたい、鯨から鯨油を取り出したいという結論を導きだせるわけではない」¹⁸とデューイは述べる。すなわち、空の雲を見て、「らくだ」とか「鯨」と思うことは、「空想する」ことであるが、そこから進んで、「らくだに乗りたい」、あるいは、「鯨から鯨油を取り出したい」

と思えば「結論」を導きだせるようになる。空の雲を見て、人が、「らくだに乗りたい」や「鯨油を取り出したい」と思うとき、その人は、「したい」ことをするために、様々なプロセスを経てその考えを推し進めて達成させようとする。当然、そこには、「結論」へと至るための「探究」が必要となってくるであろう。

また、デューイは、コロンブスの例をあげて、「探究」へと進む信念について述べている。デューイによれば、「コロンブスが世界は丸いと信じた」¹⁹とき、「コロンブスならびに彼の追従者たちは、一連の別の信念と行動へと駆り立てられた」²⁰のである。すなわち、コロンブスは、それまで「世界は平坦である」と信じられていた俗説に疑問を抱き、「世界は丸い」という新たな信念を抱いたのである。そして、コロンブスは、「インドにいたる信念」を得て、実際に航海したのである。そこには、デューイによれば、「秩序ある観念の系列」²¹と「目標と終極」²²があり、「個人による検証、詮索、探究が存在した」²³のである。

以上のように「探究」へと進む信念もあるが、その一方で、「思考が積極的に悪い方法で発展され、間違った信念や、あるいは害のある信念へと向かうこともある」²⁴と、「間違った信念」や「害のある信念」があることをデューイは指摘するのである。次に、人間の思考における「間違った信念」や「害となる信念」について見ていくことにしよう。

3. 誤謬の原因となる信念

『いかに我々は思考するのか』の「絶え間ない規制を必要とする傾向性 (tendencies)」において、デューイは誤謬の原因となる信念の問題を詳細に論じている。ここで、デューイの述べていることは、誤謬を導く「悪い信念」や「害のある信念」を教育により除去しようというのではなく、人間には「悪い信念」や「害のある信念」へと向かう「傾向性」があるので、その「傾向性」を「思考の訓練」により「規制」しようというのである。ここで、「悪い信念」、「害のある信念」の例として、デューイはイギリス経験論の代表であるベーコン (F. Bacon) とロック (J. Locke) の考えを、詳細に引用している。

(1) ベーコンの4つイドラ

デューイは誤謬を導く信念に関して、ベーコンがその著『ノウム・オルガナム』(1620) 第1部で説いた4つのイドラをあげている²⁵。(1)種族のイドラ、(2)市場のイドラ、(3)洞窟のイドラ、(4)劇場のイドラである。そ

して、デューイは、これら4つのイドラを内的原因と外的原因の2つに分けている。内的原因は、お気に入りの信念を支持するという全ての人間に共通の「種族のイドラ」と個人の特殊な気質や様々な習慣の中にある「洞窟のイドラ」である。外的原因は、社会的状況から起こる市場のイドラと局所的で一時的な社会的な風潮から起こる劇場のイドラである²⁶。

このように、デューイが4つのイドラを内的・外的原因と整理したのは、彼独自のものと思われる。こうした内的・外的原因の整理に着目すると、デューイは、特に内的原因の「洞窟のイドラ」に着目しているように思われる。それは、後述することになる「態度」の問題が、個人の気質や習慣と密接に関係しているからである。

(2) ロックの説

デューイは、誤謬を導く「悪い信念」の典型的な形式としてロックの説をあげている。ここでは、ロックの2つの著『悟性の指導 (Of the conduct of the Understanding)』(1709, 死後刊行)と『人間悟性論 (Essay Concerning Human Understanding)』(1689)を引用している²⁷。デューイは、『いかに我々は思考するのか』において、ロックの説をかなりまとまった形で引用している。しかも2つの著作におけるロックの説明の相違まで述べている。信念の問題に関して、ロックの説のように、まとまった形でデューイが引用している著作は他にないといえる。

多少長くなるが、デューイによるロック説を要約することにする。まず、デューイは、『悟性の指導』から「悪い信念」を抱く人々の問題に関する3つの説を紹介している。(1)ほとんど全く推理しないで、むしろ、両親、隣人、牧師、その他、自ら進んで絶対の信頼をする人たちの手本に従って行動し思考する人々、このような人々は、自分で思考したり検討したりする苦しみや困難から逃げようとする²⁸。(2)感情をもって理性に代理させ、自分達の行動や議論を管理しようとして決心しているにもかかわらず、理性が自分の気分や興味や党派に合う場合以外は、自己の理性も使用しなければ他人の理性に耳を傾けようとしないう人々である。(3)容易に、また誠意をもって理性に従うが、いわゆる大きな健全な婉曲した感覚の欠如のために、その問題に関係のある全体を眺めない人々である。このような人々は特定の種類の人間とだけ語り、特定の種類の書物だけを読み、特定の種類の意見だけを聞こうとする²⁹。

次に、『人間悟性論』から、デューイはロックの「悪

い信念」を導く4つの形式を述べている。(1)我々の「原則」と一致しないものは、我々によってありそうなものとして通用することはおろか、可能なこととして見られることもない³⁰。(2)悟性がひとつの鋤型に投げ込まれて、ひとつの受け継がれている諸々の仮説の型と同じように形成されている人々である³¹。(3)支配的感情。強欲な人間の理性の一端にもっともらしいことをかけ、他の一端に金銭をかけるならば、どちらが重くなるかを予測することは容易である³²。(4)権威。友人、党派、近所、国家のいずれかによって是認された共通の見解に我々の同意をまかせてしまうことである³³。

以上のように、ペーコンとロックの説を見てきたわけであるが、誤謬を導く信念に関して、デューイ自身は上記のペーコンやロックの説を整理してそれに依拠するだけである。ただし、そのことは、デューイが、思考における「悪い信念」に注意をはらっていたことの証となる。そして、そのことを以って、次に述べる「探究」における「態度」の背景には「悪い信念」の問題があったということが出来る³⁴。

このようなペーコンやロックがかつて述べた誤謬の原因となる信念についてデューイは、「彼等(ペーコンやロック)が言及した事実は、我々の日々の経験においてしばしば見られることである」³⁵と述べる。そして、この引用に引き続き、「注意深い人ならば誰でも自分自身にも他人にも、欲求に一致するものを信じようとする傾向(tendency)を看取できない日はない」³⁶とデューイは述べ、人間がいかに簡単に欲求に一致するものを「信じようとする傾向」があるのかを強調するのである。

ところで、ペーコンやロックの述べたような「悪い信念」に陥らないためには、どのようにすればよいのであろうか。デューイは、このような人間の「傾向性」を「規制」するために、「探究」の「態度」を涵養すべきであると強調するのである。次に、これについて見ていくことにしよう。

4. 「探究」における「態度」

デューイは、「いかに我々は思考するのか」において、「反省的思考」の5局面に関する論理的側面の詳細な説明とともに、「反省的思考」を推進するものの心理的側面についても詳細な説明をしている。上掲書第2章「態度の重要性」において、デューイは、「探究」の「最良の方法」に好都合な「態度」を涵養しなければならないと主張する。ここにおける「探究」に好都合な「態度」とは、「開かれた心構え(open-mindedness)」、「誠

心誠意の心遣い、あるいは専心的興味(whole-heartedness, absorbed interest)」、「責任感(responsibility)」である³⁷。

上掲書において、デューイはこのような3つの「態度」について、斜体文字による小見出しをつけて詳細に説明をしている。つまり、デューイのこのような記述の仕方には、読者(学校の教師)にわかりやすくするためとともに、強調の意味があったのではないかとと思われる。ともあれ、上掲書改定版において、整理された「態度」について、次にその内容を見ていくことにしよう。その前に、デューイによる「態度」³⁸の意味するものを指摘しておくことにする。『人間性と行為』(1922)において、デューイは、「更に心に留めておかねばならないことは、「態度」という言葉も、また素質の何らかの特別な場合を意味しているということであり、いわば、扉が開いたらすぐに飛びだそうと待ち構えている性向だということである」³⁹と述べ「態度」とは、まだ外側には顕在化されてはいないが、「飛び出だそうと待ち構えている性向」のようなものと捉えている。

(1) 「開かれた心構え」

第一の「開かれた心構え」とは、デューイによれば、「偏見、党派根性、あるいは、心を閉ざして、新しい問題を考察することや新しい考えを抱くことを喜ばないような様々な習慣」から「自由(freedom)になることとして定義される」⁴⁰。ここにおける「偏見」、「党派根性」、「心を閉ざす」、「新しい考えを抱くことを喜ばない」などのデューイによる記述は、かなりネガティブな表現である。それゆえ、いっそう、「開かれた心構え」を際立たせているといえる。つまり、デューイによれば、「開かれた心構え」とは、思考における「偏見」や「党派根性」、「心を閉ざす」、「新しい考えを抱くことを喜ばない」ような制約からの解放を意味する。ただし、思考において心を開くとは、たんに「偏見」等から「自由」になることだけを意味するのではない。デューイによれば、思考において心を開くとは、「ひとつの側面からだけでなく、むしろ多くの側面に耳を傾け」⁴¹なければならないということになる。つまり、探究者は物事を多面的に解決しなければならない。このような見解は、『民主主義と教育』(1916)第13章「教授法の本質」における、次のような表現において、いっそう明確となる。すなわち、「開かれた心構え」とは、「明確にしなければならない状況に解決の光をあてることや、あれこれの方法で活動した結果を決定するこ

とを助けるあらゆる考慮を受け入れる精神の状態を意味する」⁴²。つまり、明確にしなければならない状況を解決するために、「あれ」、「これ」と様々な方法を試みるということが大切なのである。ここにおける「あれ」、「これ」という表現には、主体者が試行錯誤していくという「態度」が現れている。

ここにおける様々な側面からの試みについて、デューイは、「開かれた心構えとは、子どものような「態度」の保持を意味」⁴³し、「発達にかくことのできない要素である」⁴⁴と述べ、「開かれた心構え」の重要性を強調するのである。

(2) 「誠心誠意の心遣い、あるいは専心的興味」

第二の「誠心誠意の心遣い」とは、デューイによれば、「いかなる人でも心の底からある対象やある主義に興味を持つ時、人はその中へ没入する。すなわち、いわば、心から、あるいは真心を込めてそうする」⁴⁵ことを意味する。ここで、探究者は、対象となる事柄に対して、「心の底から興味を抱き」、「心の底から専心し」ており、そこには、うわべだけの活動ではない、心の底からの活動が存在しているのである。

このような探究者の「態度」に関して、デューイは、「効果的な思考において、興味の分散ほど大きな敵はない」という⁴⁶。「興味の分散は不幸にもしばしば学校において作り出され」、「生徒は、先生や書物に対し、外見的なうわべだけの注意を払っているが、生徒の心の一番奥深くでの考えは自らにとって、もっと魅惑的な他の問題に向いている」⁴⁷と問題視する。デューイは、探究者の心を「心の一番奥深く」からとらえるような活動の大切さを強調する。それは、「誠心誠意の心遣い」を「専心的興味」と言い換えていることから、「探究」における主体者の「興味」の位置の重要性がわかるであろう。

(3) 「責任感」

第三の「責任感」とは、デューイによれば、「新しい見解や新しい考えの希望に対する適切な支えや『態度』であり、教材への熱中、あるいは教材に夢中になることの可能性に対する適切な支えをえるのに必要な『態度』」⁴⁸である。そして、デューイは、「知的な責任」とは、「全体性、すなわち信念における一貫性と調和」を確保するものであるという⁴⁹。一旦開始した思考は、結論を出すまで推し進められなければならないと、途中で、思考を停止したり、計画に従った信念を途中で投げ捨てたりしてはならないと、デューイは考える。そ

うでなければ、探究者である子ども達が、自分自身の知的な問題について、最後まで取り組むことができなくなるからである。

このように見てくると、デューイによる「責任感」とは、すべてのものや出来事に対する「責任感」というよりも、知的なものに限定された「責任感」といえる。

以上のように、デューイによれば、「探究」において、涵養されなければならない「重要な態度」があることを見てきた。それでは、「探究」において重要でない態度、すなわち、「探究」を推進させないような「態度」はあるのだろうか。まず、ここで浮かぶのが、デューイによる「探究」のはじまりに関する記述である。デューイは次のようにいう。すなわち、「もとの不確定な状況は『探究』に対して『開かれて (open)』いるだけでなく、その構成要素がひとかたまりとなっていないという意味でも開かれている」⁵⁰。つまり、デューイによる「探究」とは、「開かれている」状態からはじまる。このような「開かれている」状態からはじまりは、すでに指摘した3つの「態度」のうちの「開かれた心構え」と通じるものである。結局、デューイは「探究」に対して、「オープン」ということをキーワードととらえていたことが窺える。

デューイにより重要視された「開かれた」の対極にあるものは何か。デューイによれば、「開かれた心構え」の反対は、「閉じられた心 (closed-mindedness)」⁵¹であり、その意味するところは、「早熟な知的老齡 (premature intellectual old age)」⁵²である。「探究」を推進させないような「早熟な知的老齡」とは、どのようなことなのであろうか。この言葉に関して、デューイは直接説明をしていないが、この言葉の表れているテキストから解釈すると、次のようになるであろう。デューイはいう。「心が開かれているということは、子どものような態度の保持を意味し、心が閉ざされているということは早熟な知的老齡を意味するのである」⁵³。これによれば、「心が開かれている」のは、「子どものような態度」であり、「心が閉ざされている」のは、「早熟な知的老齡」となる。つまり、「早熟な知的老齡」の意味するものは、「子どものような態度」の反対にあるものとなる。デューイは、『いかに我々は思考するのか』初版において、「子どものような態度」に関して、「好奇心の強さ」、「豊かなイマジネーション」、「実験的探究を愛する気持ち」をあげている⁵⁴。これらを「子どものような態度」の特徴とするならば、「早熟な知的老齡」とは、「好奇心」が弱く、「豊かなイマジネーション」がなく、

「実験的探究を愛する気持ち」のないような人ということになる。上記のように解すると、かなり、ネガティブな人間像が浮かびあがってくる。

従って、「探究」を推進しないような「心が閉じている」「態度」というのは、「成長としての教育」を目指すデューイ教育観の批判するものといってもよいであろう。

以上のように、「探究」を妨げる態度を検討することで、よりいっそう、「探究」における3つの「態度」の重要性を際立たせることができたといえるであろう。

おわりに

本稿は、デューイの「探究の理論」において、従来、看過されてきた「探究」のはじまりにある信念の問題を考察することを通して、「探究」における「態度」について検討した。その結果、次のようなことがわかった。デューイによる「探究」とは、自分の抱いている信念を疑うことから始まるものであり、信念を抜きに「探究」は語れないものである。

しかしながら、どのような信念でもそこから「探究」が開始されるかといえば、そうとは限らない。デューイによれば、信念に「知的で実地的なかわりあい」が含まれると、信念は「探究」へと進むのである。

このように「探究」へと進む信念がある一方で、ベーコンやロックが述べたような「悪い信念」、すなわち、「誤謬の原因」となる信念もある。これらは、「探究」へと進む信念が良い信念ならば、「悪い信念」ととらえることができる。「悪い信念」の意味するところは、簡潔に述べるならば、「お気に入りの信念」、「個人の気質」、「習慣」や「気分」、「党派」、「特定の意見」のような叙述が示すように、個人的な偏見ととらえることができるであろう。

上述したような「悪い信念」に陥らないためには、どのようにすればよいかということが次に問題となってくる。そこで、デューイは、「探究」における3つの「態度」を強調するのである。すなわち、3つの「態度」とは、「開かれた心構え」、「誠心誠意の心遣い」、そして、「責任感」である。

デューイによれば、信念が「悪い信念」に陥らず、「探究」へと進むには、上記の3つの「態度」が重要となる。一方、「悪い信念」は、いわば、「閉じられた心」であり、その信念は「探究」へと進まないものである。従って、良い信念が良い思考である「反省的思考」、すなわち、「探究」へと進むためには、3つの「態度」が重要なものとなる。

以上のように、デューイによる「探究」における「態度」の強調の背景には、「探究」における信念の問題があり、信念を抜きに「探究」の「態度」は語れないし、「態度」を抜きに信念の問題も語れないものであった。つまり、「探究」における信念と「態度」は、不可分のものであり、両者を考慮にいれてこそ、はじめてデューイの「探究の理論」の本質をとらえることができるといえるのである。

註

- 1 佐々木俊介 (1974). 『探究のモデルと授業』, 明治図書.
 - 2 岡崎昭夫 (1996). 『現代アメリカにおける美術教育のカリキュラム開発に関する研究』, 筑波大学博士論文.
 - 3 牧野宇一郎 (1971). 『探究の構造』, 東海大学出版会.
 - 4 杉浦美朗 (1976). 『デューイにおける探究の研究』, 風間書房.
 - 5 早川操 (1994). 『デューイの探究教育哲学: 相互成長をめざす人間形成論再考』, 名古屋大学出版会.
 - 6 服部惣一 (2000). 「How We Think の再検討—思考の訓練についての論という視点から—」『日本デューイ学会紀要』第41号, pp. 30-34.
 - 7 デューイの信念に関する論稿は、国立国会図書館雑誌検索 (1975~2002年) によれば、次のもの一編だけである。検索条件は、論題に信念が含まれるものとした。ブルース・A・ジャナッシュ 小泉仰訳 (1978). 「デューイの信念仮言的形而上学」『日本デューイ学会紀要』第19号, pp. 169-177. この論文は、日本デューイ学会におけるブルース氏の講演を翻訳しものである。
 - 8 J. Dewey (1938). "Logic: The Theory of Inquiry" in *The Later Works, 1925-1958*, Vol. 12: 1986, edited by Jo Ann Boydston, Carbondale and Edwardsville, Southern Illinois University Press, p. 108.
- 本稿におけるデューイの引用は全て Jo Ann Boydston 編集によるデューイ全集からのものである。以下では、Early Works (1882~1898) は EW, Middle Works (1899~1924) は MW, Later Works (1925~1953) は LW と略し、巻数と頁のみを記す。
- 9 Ibid., p. 109.
 - 10 EW4, p. 365.
 - 11 拙稿 (2003). 「デューイの『自由な遊び』における

- 『精神的態度』について』『保育学研究』第41巻第1号, pp. 29-35. この論文において, 筆者はデューイが子どもの「自由な遊び」における「精神的態度」を「開かれ心構え」ととらえていることを指摘した.
- 12 新村出編 (1991) . 『広辞苑』第四版, p. 1343.
- 13 LW8, p. 115.
- 14 Ibid., p. 115.
- 15 Ibid., p. 117.
- 16 Ibid., p. 117.
- 17 Ibid., p. 117.
- 18 Ibid., p. 117.
- 19 Ibid., p. 117.
- 20 Ibid., p. 117.
- 21 Ibid., p. 117.
- 22 Ibid., p. 117.
- 23 Ibid., p. 117.
- 24 Ibid., p. 129.
- 25 Ibid., pp. 131-132.
- 26 Ibid., pp. 131-132.
- 27 Ibid., pp. 132-134.
- 28 Ibid., pp. 132.
- 29 Ibid., pp. 133.
- 30 Ibid., p. 133-134.
- 31 Ibid., p. 134.
- 32 Ibid., p. 134.
- 33 Ibid., p. 134.
- 34 斎藤新治は, 『我々はいかに思考するか』(1933)において, ロックの『悟性の指導論』を細かに引用して, 『問題解決学習』の理論構成の拠り所としている」と指摘している。
- 教育思想史学会編 (2000). 『教育思想事典』, 勁草書房, p. 734.
- 35 LW8, p. 134.
- 36 Ibid., p. 134.
- 37 Ibid., pp. 136-137
- 38 デューイの習慣論を研究した谷口は, デューイの「態度」について, 「態度は今日の社会心理学の中心概念となってきたが, デューイはこれを性向, 準備傾向, レディネスと同義語に解釈している. 或る種の精神的構え (mental set) の概念に近い」と述べている.
- 谷口忠顕 (1986). 『デューイの習慣論』, 九州大学出版会, p. 193.
- 39 MW14, p. 31.
- 40 Ibid., p. 136.
- 41 Ibid., p. 136.
- 42 MW9, p. 182.
- 43 Ibid., p. 182.
- 44 Ibid., p. 183.
- 45 LW8, Ibid., p. 137.
- 46 Ibid., p. 137.
- 47 Ibid., p. 137.
- 48 Ibid., p. 137.
- 49 Ibid., p. 138.
- 50 LW12, p. 109.
- 51 MW9, p. 182.
- 52 Ibid., p. 182.
- 53 Ibid., p. 182.
- 54 MW6, p. 179.

A study on an Attitude of Inquiry in Dewey's Theory

Junko Iitsuka

The purpose of this paper is to examine an attitude of "inquiry" through examining a problem of belief in "Dewey's Theory of Inquiry". In order to examine this, I tried to reread *Logic : The Theory of Inquiry* (1938) and *How we think* (1910 • 1933) as main texts.

According to Dewey, "Inquiry" begins with doubting the belief which human being has. Therefore, belief in "inquiry" is important in his theory. However, the problem of belief (in the beginning of "inquiry") has been overlooked.

Dewey states that belief proceeds to "inquiry" when it involves "intellectual and practical commitment." On the other hand, according to Bacon and Locke, there are main sources of error in reaching beliefs and typical forms of wrong beliefs. In Dewey, wrong beliefs are not reaching "inquiry." Because inquire's mind is closed-minded.

Therefore, Dewey emphasized that three attitudes of "inquiry" were important to regulate wrong beliefs. The three attitudes discussed are "open-mindedness", "whole-heartedness" and "responsibility."

Through this examination, I suggest that Dewey thinks these three attitudes are important for proceeding to "inquiry" not transferring wrong belief. There was a problem of belief in "inquiry" in the background of the emphasis of attitude of "inquiry" by Dewey, and a problem of attitudes in the background of consideration of the wrong beliefs. In other words, attitudes are inseparable from belief in "inquiry". I conclude that the nature of theory of "inquiry" can be understood when both (beliefs and attitudes) are taken into account.